

第十一章 土地の地代——その性質と形成（六）

過去四世紀における銀価の変動に関する補論

第三期

一六三〇〜一六四〇年、なかでも一六三六年ごろまでに、アメリカ新鉱の影響による銀価の下落はほぼ出尽くし、穀物に対する相対価値はそれ以降、さらに下がらなかったとみられる。その後は今世紀に入ってやや持ち直し、前世紀末にはすでに上昇の兆しがあった可能性が高い。

同じ資料では、一六三七〜一七〇〇年（前世紀の最後の六十四年）、ウィンザー市場の最上等小麦（九ブッシェル＝一クォーター）の平均価格は二ポンド十一シリング三分の一ペンスとされる。直前の十六年に比べた上昇幅はわずか一ポンド三分の一ペンスにすぎず、この六十四年には天候要因を上回る深刻な穀物不足を招いた出来事が二度あったため、銀の価値がさらに低下したと仮定しなくても、この小幅な値上がりは十分に説明できる。

ひとつ目の要因は内戦である。耕作意欲を奪い、流通を断ち、天候だけでは起きない

水準まで穀価を押し上げた。影響は王国内の各市場に広がり、とりわけ遠隔地からの供給に頼るロンドン近郊で目立った。記録では、ウインザー市場の最上等小麦は一六四八年に四ポンド五シリング、一六四九年に四ポンド（いずれも九ブッシェル一クォーター）に達している。一六三七年以前十六年の平均二ポンド十シリングと比べ、この二年の超過分は計三ポンド五シリングで、これを前世紀最後の六十四年に平均すれば、その期間の小幅な値上がりのお大半はこれだけで説明できる。しかも、内戦に伴う高値はこれに限られない。

二つ目の出来事は、一六八八年に導入された穀物輸出奨励金（バウンティ）である。耕作を促して長期的に国内供給を増やし、穀物価を下げた可能性は指摘されてきた。だが、その評価は後に述べるとして、少なくとも一六八八―一七〇〇年という短期には効果は出ていない。この時期に起きたのは、毎年の余剰の輸出が進み、豊作の余りで凶作を補う平準化が働かず、結果として国内価格が上がったことだけだ。実際、一六九三―一六九九年の英国の不作は、主因は欧州広域に及ぶ天候不順だったが、奨励金が逼迫をいくぶん強めたと見られる。一六九九年には穀物の追加輸出が九カ月間禁じられた。同じ時期には、名目価格だけを押し上げた第三の要因もあった。剪断や摩耗によって

銀貨の品位が大きく劣化したのである。この悪化はチャールズ二世の治世に始まり、一六九五年まで続いた。ロウンズによれば、当時流通していた銀貨は公定品位より平均で約二十五%も軽かった。市場の名目価格は、公定上の規定量ではなく実際の銀含有量に連動する。ゆえに、貨幣が大きく劣化している局面では、標準に近い局面より名目価格は必然的に高くなる。

今世紀の銀貨は標準重量からの乖離がかつてなく大きい、交換相手である金貨の価値が下支えし、銀貨の名目価値は保たれてきた。直近の金貨再鑄前にも金貨の摩耗はあったものの、銀貨ほど深刻ではない。これに対し一六九五年には金貨が銀貨の価値を支えられず、摩耗・剪断銀貨三十シリングで一ギニーが通用した。銀地金相場も、直近の再鑄前はオンス当たり五シリング七ペンス（造幣局価格十五ペンス）程度だったのに、一六九五年は六シリング五ペンス（同十五ペンス）まで上がった。したがって、直近の再鑄前では金銀通貨を合わせても標準比で約八%の目減りと見なされたのに対し、一六九五年は約二五%の目減りと見積もられた。もともと、今世紀初頭（ウィリアム王の大再鑄直後）には流通銀貨の多くが今より標準に近かったはずで、この世紀には耕作と流通を断つ内戦のような大乱もなかった。輸出奨励金（バウンティ）も長く続き、耕作

拡大による供給増が価格の下押しに働いたと考えられる（上げ下げの両作用のうち下押しが勝ったとの見方が多い）。実際、イートン校台帳によれば、今世紀最初の六十四年間に於けるウインザー市場の最上等小麦（九ブッシェル）の平均価格は二ポンド六と二分の一ペンスで、前世紀末の六十四年間より約十シリング六ペンス（四分の一強）安く、一六三六年以前の十六年間より約九シリング六ペンス安い。さらに一六二〇年以前の二十六年間と比べても約一シリング安く、中等小麦八ブッシェル換算ではおよそ三十二シリングとなる。

以上より、銀の価値は今世紀を通じて穀物に対してやや上昇し、その兆しは前世紀末にはすでに見られたと考えられる。

一六八七年、ウインザー市場の最上等小麦（九ブッシェル＝一クォーター）は一ポンド五シリング二ペンスとなり、一五九五年以降の最低水準であった。

一六八八年、統計と経済に通じたグレゴリー・キングは「並年（中庸の豊作年）」の小麦平均価格を、生産者価格でブッシェル三シリング六ペンス、すなわちクォーター（二・九ブッシェル）二十八シリングと推計した。ここでの生産者価格とは、農家が数年契約で一定量を商人に引き渡す際の契約価格であり、販路確保と売りさばきの手

間・市況変動のリスクを避けられる分、一般に市場平均より低めに出る。キングは当時、並年であればクォーター二十八シリングが標準的な契約水準で、近年の異常不作による逼迫が起こる以前は、平年の相場としてもこの水準が通例だったと見ていた。

一六八八年、議会は穀物輸出に奨励金（バウンティ）を導入した。多数派を占めた在郷紳士（地主層）が穀価の下落を肌で感じ、チャールズ一世・三世期の高値帯へ価格を人為的に戻す狙いからである。上限は小麦一クォーター当たり四十八シリングで、同年にキングが示した「並年の生産者価格」二十八シリングより二十シリング、すなわち七分の五だけ高い。キングの推算を信賴するなら、四十八シリングは奨励なしには「異常な凶作年」を除き到達しがたい水準である。当時のウィリアム王政は基盤がまだ脆弱で、年次地租の恒久化を在郷紳士に請う立場でもあり、彼らの要請を退けにくい政治状況にあった。

以上より、銀の穀物に対する相対価値は前世紀末までにいくぶん上向き、今世紀の大半でも上昇基調を保ったと推測される。もともと、耕作の現場では輸出奨励金という制度要因により、その上昇幅は本来より見えにくくなった可能性が高い。

豊作の年には、輸出奨励金が余剰の輸出を生み、穀物価格は本来の水準より高く保た

れる。最も実り多い年でも価格を下支えし、耕作を促すことが、この制度設計の公然たる目的だからである。

たしかに大凶作の年には奨励金は多くの場合停止される。それでも影響は残る。豊年の奨励が過度の輸出を生み、ひとつの年の豊かさで別の年の不足を補う「ならし効果」をたびたび損ない、その分だけ価格は上がりやすくなるからである。

要するに、豊作でも凶作でも、輸出奨励は、その時点の耕作条件で自然に決まる水準より穀物価格を押し上げる。ゆえに、もし今世紀初めの六十四年間の平均価格が前世紀末の六十四年間より低いのなら、耕作条件が変わらないかぎり、奨励金がなければ平均価格はさらに下がっていたに違いない。

確かに「バウンティがなければ耕作の水準は違っていたはずだ」という反論は成り立つ。制度が農業にもたらした帰結は後の該当章で検討する。ここで強調したいのは、銀の穀物比での上昇が英国だけの現象ではないという点である。同時期のフランスでもほぼ同程度の比率で確認され、デュブレ・ド・サン＝モール氏・メサンス氏・『穀物取締（穀物警察）論』の著者という三氏の誠実で精緻な価格集成がこれを裏づける。しかもフランスでは一七六四年まで穀物輸出が法で禁じられていた。輸出禁止下でも同様の値

下がりがあった以上、英国における輸出奨励という「異例の後押し」を値下がりの主因とみなすのは不合理である。

穀物の平均貨幣価格の変動は、穀物の実質価値の下落ではなく、欧州市場で銀の実質価値が段階的に上がった結果と捉えるのが妥当である。長期にわたり、穀物は銀や他の多くの品目より正確な価値尺度である。実際、アメリカの豊富な鉱床が見つかり、穀物の貨幣価格が従来の三、四倍に跳ね上がった局面でも、それは穀物の実質値上がりではなく、銀の実質値下がりの反映だと広く解釈された。同様に、今世紀最初の六十四年間に穀物の平均貨幣価格が前世紀の大半よりわずかに低下したのなら、それもまた穀物の実質価値の低下ではなく、欧州での銀の実質価値の上昇を映していると考えるべきである。

過去十、十二年の穀価高は、欧州市場で銀の実質価値がなお下がっているとの憶測を招くが、実際は異常気象の影響が大きく、恒常的ではない一時的な高騰とみるのが妥当である。欧州広域で不作が続く、さらにポーランドの混乱が、平時は同国に依存していた地域の不足を増幅させた。長期の不順は稀ではあるが特異ではない。穀価史を見れば類例はいくつも挙げられる。十年の大凶作は、十年の大豊作と同じく起こり得る。実際、

一七四一〜一七五〇年の安値局面は直近八十年の高値を十分に打ち消す水準で、イートン・カレッジの台帳によれば、この期のウインザー市場の最上等小麦（九ブッシェル）平均は一ポンド十三シリング九と二分の一ペンスにすぎず、今世紀前半六十四年の平均より約六シリング三ペンス安い。中等小麦（八ブッシェル）の平均もおよそ一ポンド六シリング八ペンスである。

とはいえ、一七四一〜一七五〇年には、輸出奨励金（バウンティ）が国内の穀価の自然な下落を抑えた。税関台帳には、この十年間の穀物輸出が八百二万九千五百六十六クォーターブッシェル、奨励金総額が百五十一万四千九百六十二ポンド十七シリング四と二分の一ペンスと記録されている。一七四九年、ペラム首相は庶民院で、直近三年に異例の額の奨励金が投じられたと述べ、翌一七五〇年の単年支払いはさらに増えて三十二万四千百七十六ポンド十シリング六ペンスに達した。奨励金に支えられた輸出が国内相場の下押しを打ち消し、穀価を本来の水準より高く保ったのである。

本章末の付表には、対象の十年分が独立して掲げられ、直前十年の明細も併載されている。直前十年の平均も今世紀前半六十四年の平均を下回るが、差は大きくない。なお、一七四〇年は異例の凶作年である。一七五〇年以前の二十年は、一七七〇年以前の二十

年と鮮やかな対照をなす。前者は一、二年の高値があつても世紀平均を大きく下回り、後者は一七五九年のような安値年を含んでも世紀平均を大きく上回つた。前者の下振れが後者の上振れほど大きくなかったのは、輸出奨励金（バウンティ）の作用と見るのが妥当である。いずれにせよ、この変化はあまりに急で、銀価のような緩やかな要因には歸しにくい。かかる急変は季節の偶発的変動など、即効性のある要因でしか説明できない。

英国では今世紀を通じて名目賃金が上がつたが、その原因は欧州での銀価下落ではない。国内の労働需要が強まり、国全体の広い繁栄がそれを支えたと考えるのが妥当である。対照的に、同程度の好況ではないフランスでは、前世紀半ば以降、名目賃金が小麦の平均価格に連動してじりじり下がつた。同国では前世紀も今世紀も、一般の日雇い賃金は小麦一セプティエ（ウィンチェスター・ブッシュェル四強）の平均価格のおよそ二十分の一で安定してきた。他方、英国では今世紀に実質賃金（労働者が受け取る生活必需と便益の実量）が大きく伸びている。したがって名目賃金の上昇は、欧州全体の銀価下落ではなく、英国の好条件のもとで国内の「労働の実勢価格」が上がつた結果である。アメリカ発見直後は、銀は従来並みの高値で売れ、鉱山利潤は自然率を大きく上回つ

ていた。しかし欧州の輸入業者はほどなく、その価格では毎年の輸入量をさばききれないと悟った。銀は次第に少ない財としか交換できなくなり、価格は緩やかに下がって最終的に自然価格（賃金・資本利潤・地代を自然な率でちょうど賄える水準）に落ち着いた。ペルーの多くの銀山では、国王税（総産出の一割）が地代を食い尽くす。この税は当初二分の一、のちに三分の一、五分の一へ下がり、結局十分の一となって現在も続いている。多くの鉱山では、資本回収と通常利潤を差し引くと残りはせいぜいこの一割税で消え、かつて非常に高かった採掘利潤は、今では操業をかううじて続けられる程度まで落ちていると見られる。

一五〇四年、スペイン王は銀への課税を「登録銀」の五分の一に引き下げた。これは、世界最大級のポトシ鉱山（一五四五年発見）より四一年前の決定である。その後の約九十年（一六三六年以前）に、アメリカの主要鉱山は供給を大きく増やし、王税を払い続けながらも欧州市場の銀価を下限に近い自然価格まで押し下げたとみられる。独占がなければ、九十年は、どの品目でも課税を織り込んだ長期の「自然価格」（事実上の下限）へ価格が収斂するのに十分な時間である。

本来なら、欧州市場の銀価格はさらに下落し、一七三六年の十分の一税を金と同じ二

十分の一へ引き下げるか、現在稼働するアメリカ鉱山の多くを閉鎖せざるを得なかったであろう。だが、銀需要の着実な増加、すなわちアメリカ産銀の販路拡大がこの事態を食い止め、欧州市場の銀価を下支えし、前世紀半ばよりむしろわずかに高めた可能性すらある。

新大陸の発見以降、アメリカの銀山の産出物が向かう市場は、徐々かつ継続的に拡大してきた。

まず欧州の市場は着実に広がった。新大陸発見後、英国・オランダ・フランス・ドイツに加え、スウェーデン・デンマーク・ロシアでも農業と製造業が大きく伸びた。イタリアは後退しておらず、衰勢はペルー征服以前に限られ、その後はいくぶん回復したと見られる。他方、スペインとポルトガルは後退したとの通説があるが、ポルトガルは欧州のごく一隅にすぎず、スペインの落ち込みも言われるほど深刻ではない可能性がある。十六世紀初頭のスペインは、のちに大きく発展するフランスと比べても貧しく、両国をたびたび巡ったカール五世の「フランスは万物に富み、スペインは万物を欠く」との言葉がそれを物語る。農工業の産出が拡大すれば流通に必要な銀貨の量は必然的に増え、富裕層の増加は銀製の食器や装飾品の需要を同様に押し上げた。

第二に、アメリカ大陸そのものが自国産銀の新たな市場として急速に立ち上がった。

農業・産業・人口の伸びは欧州の最繁栄国を明らかに上回り、需要もそれに歩調を合わせて急拡大している。英領植民地は貨幣と銀器の双方で継続的な供給を要する、従来需要のなかった広大な新市場であり、スペイン・ポルトガルの植民地の多くも同様である。新グラナダ・ユカタン・パラグアイ・ブラジルは、欧州人到来以前には技艺も農業も乏しい社会と見なされたが、いまや相応の水準に普及した。メキシコやペルーは嚴密の意味で新市場ではないものの、過去に比べ市場規模は著しく拡大した。古代の華やかさをうたう逸話に反し、初期の発見・征服の一次記録は、当時の住民の技艺・農業・商業の水準をウクライナのタタール人にも及ばぬ低さと描く。より文明的とされたペルーですら貨幣を持たず、金銀は裝飾にとどまり、物々交換ゆえ分業はほとんど進んでいなかった。職人は少なく、多くは君主・貴族・聖職者に扶養される従者や奴隸であった。古代メキシコ・ペルーの工芸が欧州にもたらした製造品は一つもない。遠征したスペイン軍は多くても五百名、時にはその半数にも満たなかったのに糧秣の確保に苦しみ、遠征が飢饉を招いたという記録は、「人口稠密・耕作盛ん」という常套句の誇張を示す。統治の面では英領に劣るところがあるものの、スペイン植民地の農業・改良・人口の伸びは

欧州のどの国よりも速い。肥沃な土壤と温暖な氣候、そして新植民地に共通する土地の豊富さと安さが、統治の欠陥を補つて余りある利点となるからである。一七一三年にフレジエはリマの人口を二万五千〇二万八千と記し、一七四〇〇四六年に滞在したウリョアは五万超と報告する。チリやペルーの主要都市でも同様の伸びが見られ、これらの情報信頼性は高い。要するに、アメリカは自国の銀の新市場であり、その需要増は欧州の最繁栄国をも上回る速度で進んでいる。

第三に、東インドはアメリカ産銀の重要な市場であり、鉱山の発見以来その吸収力は一貫して増加した。アカブルコ船による米亜直航は拡大し、欧州経由の間接流通はさらに速い伸びを示した。十六世紀にはポルトガルが定期航路を独占したが、世紀末にオランダが参入してほどなく主要拠点を奪い、前世紀を通じては両国が主導しつつもオランダの伸長がポルトガルの縮小を上回った。イギリスとフランスは前世紀から取引を持ち、今世紀に大きく拡大した。スウェーデンとデンマークの参入も今世紀であり、ロシアもシベリアとタタールを越える陸路隊商で北京との定期交流を始めた。直近の戦争でフランス東インド会社がほぼ壊滅したことを除けば、各国の東インド貿易は概ね右肩上がりである。背景には、欧州で東インド産品の消費が雇用を押し上げていることがある。茶

は前世紀半ばまでほとんど無縁だったのに、今ではイギリス東インド会社の国内向け年輸入だけで百五十万ポンドを超え、オランダ經由やヨーテボリ、さらに（同社が健在だった時期の）フランス海岸からの密輸も加わる。中国磁器・モルッカの香辛料・ベンガルの綿織物も同様に伸び、前世紀に欧州全体で東インド向けに動員された船腹は、近年の削減前のイギリス東インド会社単独の船腹量と大差なかったと推測される。

第三に、東インド（とりわけ中国・インド）では、欧州の進出初期から貴金属の評価が欧州より高く、いまも変わらない。年二―三回の収穫が見込める稲作地帯は食糧が潤沢で人口も厚く、富者は自家消費を超える余剰を背景に多くの労働を雇えるため、大貴族の従者の規模や華やかさは欧州随一の富豪をものぐ。この食糧余剰は貴金属・宝石といった希少品に対しても多くの食糧を支払う力となり、仮に鉱山の豊度が欧州と同じでも、インドでは貴金属が欧州より多くの食糧と交換されるのが自然である。実際にはインド向けの貴金属鉱山は乏しく、宝石鉱山は豊かであったと見られるため、同地では貴金属は宝石に対してやや、食糧に対しては一段と高く評価される。結果として、ダイヤの名目価格は欧州よりやや低く、食糧の名目価格ははるかに安い。他方、中国・インドの実質賃金（労働者が受け取る生活必需の量）は欧州の多くより低く、賃金で買える

食糧が少ないうえに食糧の名目価格自体が低いので、名目賃金も二重の意味で低く出る。製造品の名目価格は賃金に比例し、両地域の熟練は欧州に大きく劣らないため、製造品は総じて欧州より安い。さらに欧州では陸上輸送が価格を押し上げるのに対し、中国・インドは内陸水運の発達で輸送費を節約でき、いっそう低価格になる。ゆえに貴金属、なかでも銀は欧州からインドへの最有利な輸出品であり、同じ投入に対しインドでより多くの労働や財を買い付けられる。とりわけ中国などの金銀比価が十と十二対一と欧州の十四と十五対一より銀高・金安で、銀十と十二オンスで金一オンスが買える（欧州では十四と十五オンス必要）ためである。この結果、東インド航路の欧州船の主要積荷は一貫して銀となり、マニラへ向かうアカプルコ船でも最重要の貨物となる。新大陸の銀は、旧大陸の両端を結ぶ交易を支える主要商材として、遠隔地同士を結び付けている。

これほど広がった市場を満たすには、毎年の銀産出量は、繁栄する諸国で増え続ける貨幣や銀器の需要を支えるだけでなく、銀を用いるすべての国で避けられない摩耗や損耗を補える水準でなければならない。

貴金属は、貨幣は摩耗し、銀器は使用や磨きで絶えず減る。この減り方は目に見え、用途が広いぶん、その補充だけで毎年かなりの供給が要る。さらに一部の製造業での消

費は、総量こそ漸減消耗と同程度かもしれないが、進みが速いためいつそう目立つ。たとえばバーミンガムでは、鍍金・メッキに毎年五万ポンド超（額面）の金銀が使われ、金属として戻らないという。この規模から、世界各地の同種の製造やレース・刺繍・金銀織物、書籍や家具の金箔押しに消える金銀の年次消費がいかに大きいかが推し量れる。加えて、海上・陸上の輸送中にも毎年かなり失われるうえ、多くのアジア諸国で広く行われる財宝の土中埋蔵は、埋蔵者の死とともに所在が不明となり、回収不能な金銀をいっそう増やしている。

最新の精査では、カディスとリスボンの両港に入る金銀は、登録分に推定密輸分を加えて、年間おおむね六百万ポンド（英貨）に達する。

メゲンスの推計では、スペイン（一七四八〜五三年）とポルトガル（一七四七〜五三年）への貴金属流入は、銀が計百十万千七百七十ロイポンド、金が二万九千九百四十トロイポンドである。相場換算では、銀は一ポンド当たり六十二シリングで三百四十一万三千四百三十一ポンド十シリング、金は一ポンド当たり四四・五ギニーで二百三十三万三千四百四十六ポンド十四シリング、合計五百七十四万六千八百七十八ポンド四シリングとなる。登録統計は正確で、産地別・金銀別の内訳が明示され、密輸分の推定も織り込

まれているため、老練な商人としての彼の所見は信頼性が高い。

『二つのインドにおける欧州人の植民史』の著者によれば、スペイン向け登録金銀流入（年平均、一七五四～六四年の十一年）は十レアル建てで千三百九十八万四千四百八十五と四分の三ピアストルで、密輸を含めると年千七百万ピアストル、すなわち一ピアストルⅡ四シリング六ペンスで約三百八十二万五千ポンドに達する。出所別の寄与と金銀別の登録数量も示される。さらに、ブラジル金のリスボン流入は国王税（品位金の五分の一）から逆算して千八百万クルザードⅡ仏貨四千五百万リーヴル、約二百万ポンドと見積もられ、密輸分八分の一（約二十五万ポンド）を加えると約二百二十五万ポンドとなる。以上を合算すると、スペインとポルトガルへの年当たりの貴金属流入はおよそ六百七万五千ポンドである。

ほかにも未刊ながら信頼性の高い記録が複数あり、年ごとの総流入額は平均で約六百万ポンドに収斂し、年度により多少の増減がある点で一致している。

ただし、カデイスとリスボンへの年輸入はアメリカ鉱山の年産全量に届かない。アカブルコ船でマニラへ送られる分、スペイン植民地と他欧州植民地との密貿易に回る分、産地に留まる分があるためである。金銀鉱は世界各地に分布するが、産出規模はアメリカ

カが突出し、他地域の既知鉱山は桁違いに小さい。その多くは結局、毎年カデイスとリスボンに流入する。それでも英バーミンガムだけで年五万ポンドを消費し、年輸入六百万ポンドの百二十分の一に当たる。以上から、金銀の世界的な年間総消費は年産とほぼ釣り合い、残りは成長国の需要増を賄う程度にとどまる。むしろ供給が不足し、欧州市場の金銀価格をいくぶん押し上げている可能性もある。

銅や鉄は、毎年市場に出る量が金や銀より桁違いに多い。それでも、需要超過で余って値が限りなく下がると考える者はいない。ならば、なぜ金銀だけがそうなると想定するのか。確かに粗金属は硬く過酷な用途に回されやすく、価値が低いぶん保管もおろそかになりがちだ。だが金銀も不減ではない。紛失や浪費、消費などで失われる点は、粗金属と同じである。

金属の価格は長期的には緩やかに動くとしても、年次の変動幅は土地の粗生産物の多くより小さい。とくに貴金属は粗金属より急変しにくい。背景には金属の高い耐久性がある。昨年の穀物はその年のうちにほぼ消費される一方、数百年前に掘られた鉄はいまも用いられ、数千年前に産出された金でさえ現役かもしれない。世界の穀物消費はその年の収穫量にほぼ比例して増減するが、使用中の鉄の総量は隣接する二つの年の産出の

偶然の差にはほとんど左右されず、金ではその影響はさらに小さい。ゆえに、鉾山の年産が穀物の収穫以上に変動しても、金属価格は穀物ほど大きくは揺れない。